

## 資料：医学生に対する「死の教育」アンケート調査

木之下明美, 木之下 徹, 大間敏美,  
飯島純夫, 浅香昭雄

医学教育に「死の教育」を導入する必要性に関する一つの資料となるべく、医学生の「死」に対する認識のアンケート調査を行なった。対象は某医科大学医学部学生224人で、平均年齢は23.3歳である。1) 2年生81.2%, 4年生78.67%, 6年生54.5%が「臨終に立ち会ったことがない」と回答した。2) 「死」という言葉から受ける感じとして「悲しい」、「さびしい」、「こわい」と回答した者が多かった。因子分析の結果「死を遠くに感じる(感覚的)」と「死を身近に感じる(体験的)」の2つの因子が抽出できた。3) 2年生78.1%, 4年生69.1%, 6年生71.2%と大半の医学生が「告知」を希望している。4) 2年生60.9%, 4年生57.4%, 6年生56.1%が「延命医療を望まない」と回答している。また「死の経験回数が多いと延命医療希望が多くなる」傾向が読み取れる。5) ほとんどの学生(2年生98.4%, 4年生89.4%, 6年生93.9%)がホスピスという言葉を知っており、79%の者が「我が家で死を迎えたい」と回答している。6) 2年生37.5%, 4年生47.9%, 6年生40.9%が「死について積極的に話題にすべきでない」と回答している。7) 2年生53.1%, 4年生48.9%, 6年生59.1%が「死の教育を必要」と回答している。8) 「死」の意味として「こぼむことができないこと」、「人生の終着駅」、「運命で決まっていること」と回答した者が多かった。因子分析の結果「生への執着」と「死への期待」の2つの因子が抽出できた。9) 医学生の態度決定に影響を及ぼす因子を明らかにしたいと考え、共分散構造解析を行なったが、その人の持つ「死の意味」がどのように態度の決定に影響を及ぼすかは、本研究では見い出せなかった。

キーワード：死の教育, 医学教育, 生と死

### I. 結 言

「生と死」、この2つの言葉は対語であるが、「生」と比べ「死」はとかくタブー視されがちであった。最近になってようやく「ターミナル・ケア」や「ホスピス・ケア」が注目されるようになり、「いかに死すべきか」、「いかに死なすべきか」が大きな問題となってきた。また、学校教育や医学教育に「死の教育」を導入することの必要性についても、渋谷<sup>1)</sup>の心理学的なアプローチ等多く論じられるようになってきた。しかし将来「生と死」に携わることになる医学部学生が、「死」をどのようにとらえているかの実態把握にはまだ暗中模索の観がある。そこで我々はこれらの論議の

一つの資料となるべく、医学部学生の「死」に対する認識のアンケート調査を行なった。

### II. 対象及び方法

対象は某医科大学医学部学生(医学生と略)224人で、そのうち2年生が64人、4年生が94人、6年生が66人である。平均年齢は23.3歳で、年齢の幅は19歳~39歳である。アンケートの調査項目は七木田<sup>2)</sup>の「死についてのアンケート」を使用した。実施期間は1991年7月~8月である。分析に際しては、SAS (ver. 6.04)のFactor, Calis, Corr, Freq Procedureを用いた。

### III. 結 果

#### 1) 「死」の経験

臨終に立ち会った経験の有無では、2年生81.2%、

表1 あなたは死にゆく人の臨終の場に立ち会ったことがありますか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
はい	12 (18.8)	20 (21.3)	30 (45.5)
いいえ	52 (81.2)	74 (78.7)	36 (54.5)

人数 (%)

表2 あなたの死生観に影響を与えた死はいつでしたか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
小学校前 ( ~6歳)	3 ( 4.7)	4 ( 4.3)	3 ( 4.5)
小学生のとき ( 7~12歳)	14 (21.9)	19 (20.2)	10 (15.2)
中学生のとき (13~15歳)	11 (17.2)	14 (14.9)	5 ( 7.6)
高校生のとき (16~18歳)	11 (17.2)	8 ( 8.5)	4 ( 6.1)
高校以降 (19歳~)	7 (10.9)	17 (18.1)	16 (24.2)
その他	18 (28.1)	32 (34.0)	28 (42.4)

人数 (%)

4年生78.7%，6年生54.5%が「臨終に立ち会ったことがない」と回答している。(表1参照)このことから医学生の死に接する機会の少ないことがうかがえる。「ある」と回答した者のほとんど(72.9%)は、臨終に立ち会った経験が1回の者である。次に死生観に影響を与えた死についての回答を表2・表3に示した。死生観をどう定義するか等難しい質問であるが、「祖父母(曾祖父母)の死が死生観に影響を与えた」と回答する者が全体で39.2%見られた。

2) 「死」という言葉から受ける感じ

表4のように「悲しい」、「さびしい」、「こわい」と回答した者が多かった。立川<sup>9)</sup>が大学一年生に行なったアンケート調査では死のイメージの上位3つは「こわい」、「苦しい」、「悲しい」だったという。今回のアンケートは「死」という言葉から受ける感じを、11の言葉から順位づけで3つ選んでもらうものであったが、個々の言葉の相関を探索的に因子分析した結果が図1である。各変数に最高3点の重みづけをし、11の言葉の回答数が明らかに少ないものを除き、9の言葉に限定して因子分析を行なった。分析には、死のイメージに介在する潜在的な変数に相関を持たせるため promax 回転<sup>4)</sup>を用いた。また解釈が困難となるため、抽出因子数を2因子に限定した。その結果「死を遠くに感じる(感覚的)」と「死を身近に感じる(体験的)」

表3 どのような死に影響を受けましたか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
祖父母(曾祖父母)	16 (25.0)	28 (29.8)	14 (21.2)
友人	9 (14.1)	4 ( 4.3)	6 ( 9.1)
親戚	4 ( 6.3)	8 ( 8.5)	3 ( 4.5)
ペット	2 ( 3.1)	1 ( 1.1)	3 ( 4.5)
両親	2 ( 3.1)	4 ( 4.3)	2 ( 3.0)
兄弟	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
身近な人	3 ( 4.7)	7 ( 7.4)	1 ( 1.5)
ニュース、本	5 ( 7.8)	4 ( 4.3)	0 ( 0.0)
その他	6 ( 9.4)	7 ( 7.4)	9 (13.6)
無回答(影響なし)	17 (26.5)	31 (32.9)	28 (42.4)

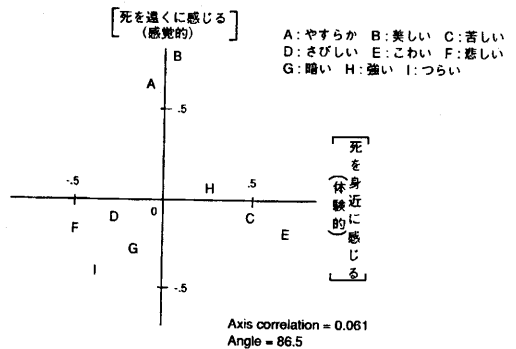
人数 (%)

表4 死ということばからどんな感じを持ちますか (1番ふさわしいと選んだ言葉)

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
美しい	0 ( 0.0)	2 ( 2.1)	1 ( 1.5)
やすらか	7 (10.9)	10 (10.6)	6 ( 9.1)
苦しい	1 ( 1.6)	2 ( 2.1)	2 ( 3.0)
さびしい	9 (14.1)	14 (14.9)	13 (19.7)
こわい	8 (12.5)	17 (18.1)	9 (13.6)
悲しい	26 (40.6)	31 (33.0)	15 (22.7)
見苦しい	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
暗い	0 ( 0.0)	1 ( 1.1)	1 ( 1.5)
強い	0 ( 0.0)	1 ( 1.1)	0 ( 0.0)
敗北	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)	0 ( 0.0)
つらい	6 ( 9.4)	8 ( 8.5)	3 ( 4.5)
その他	4 ( 6.2)	7 ( 7.4)	10 (15.2)

人数 (%)

図1 「死という言葉から受ける感じ」に関する因子分析(Promax 回転)



の2つの因子が、Promax 回転の2因子軸のアンブル角度が86.5度で、かなり独立性の高い因子として抽出できた。

3) 告知希望の有無

表5 あなたは助からないガンなどで死がさけられないとわかったときに、それを告げて欲しいと思いますか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
はい	50 (78.1)	65 (69.1)	47 (71.2)
いいえ	5 (7.8)	8 (8.5)	5 (7.6)
わからない	9 (14.1)	21 (22.3)	14 (21.2)

人数 (%)

表6 あなたは助からないガンなどで死がさけられないとわかったときに、できるだけ延命できるような治療を望みますか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
はい	5 (7.8)	19 (20.2)	12 (18.2)
いいえ	39 (60.9)	54 (57.4)	37 (56.1)
わからない	20 (31.3)	21 (22.3)	16 (24.2)

人数 (%)

表7 「延命医療希望の有無」と「死の経験」

		延命医療の希望		
		いいえ (-1)	わからない (0)	はい (1)
死の経験	1回	33	5	5
	2回	4	4	1
	3回	2	2	2
	4回	0	1	0

人数

( Pearson Correlation Coefficients = 0.305 )  
P-Value = 0.019

2年生78.1%，4年生69.1%，6年生71.2%と大半の医学生が、「助からないガンなどで死が避けられないとわかったときにそれを告げてほしい」と回答している。(表5参照)学年が上がるごとに告知希望が減少していることは興味深い、この傾向には統計的な有意差は認められなかった。また前述した「死の経験」との関連も見られなかった。

4) 延命医療希望の有無

2年生60.9%，4年生57.4%，6年生56.1%が「延命医療を望まない」と回答している。(表6参照)今日の医療的環境を鑑みると、調査対象の医学生の半数以

表8 あなたはホスピスということばは知っていますか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
知っている	63 (98.4)	84 (89.4)	62 (93.9)
知らない	1 (1.6)	10 (10.6)	3 (4.5)

人数 (%)

表9 死について積極的に話題にするべきだと考えますか

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
話題にすべき	40 (62.5)	45 (47.9)	37 (56.1)
話題にすべきでない	24 (37.5)	45 (47.9)	27 (40.9)
わからない	0 (0.0)	4 (4.2)	2 (3.0)

人数 (%)

上の者が、延命医療を希望しないというのは特筆に値する。また前述した「死の経験」との相関が見られたが(表7参照)、経験2回以上の者の各セル内の人数が少なくこれが相関係数に影響を与えていると考えられるため、データを併合し再度分析を試みた。この分析から、「死の経験回数が多いと延命医療希望が多くなる」傾向が読み取れた。(χ<sup>2</sup>=9.689, d. f. = 2, P-value=0.00787)

5) 「ホスピス」の認知度

ほとんどの学生(2年生98.4%，4年生89.4%，6年生93.9%)が「ホスピス」という言葉を知っていた。(表8参照)また、「どこで死を迎えるのが良いと考えているか」という問いに対して、全体で79%の者が「我が家」と回答している。性別で見ると男82.4%，女69.8%と男の方が多かったが、統計的に有意ではなかった。

6) 「死」について積極的に話題にすべきか

2年生37.5%，4年生47.9%，6年生40.9%が「死について積極的に話題にすべきでない」と回答している。(表9参照)またこの質問項目と次に述べる「死の教育の必要性」とには有意な相関が認められた。(χ<sup>2</sup>=38.1, d. f. = 2, P-value=0.0000)すなわち「死について積極的に話題にすべき」と回答した者は、「死の教育が必要」と考えている傾向が読み取れる。

7) 死の教育(死の準備教育)の必要性

表10 死の教育の必要性

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
必要	34 (53.1)	46 (48.9)	39 (59.1)
不必要	8 (12.5)	23 (24.5)	16 (24.2)
わからない	22 (34.4)	25 (26.6)	10 (15.2)

人数 (%)

表11 死の教育の内容

	医学生		
	2年生	4年生	6年生
時間の貴重さを発見し、生の価値観の見直しと再評価を促す	26.0%	24.3%	21.7%
自分の死にたいする自分の考えを持つ	19.0%	17.4%	20.9%
命あるものは死ぬめのだという事実を教える	14.0%	16.0%	10.4%
自分の死をまっとうできるように死について考える	11.0%	13.2%	18.3%
死の恐怖を少なくし、心理的負担を取り除く	11.0%	9.0%	11.3%

(上位から5位まで)

表12 あなたにとって死とは何を意味しますか  
(1番ふさわしいと選んだ意味)

	医学生
こぼむことができないこと	61
人生の終着駅	45
運命で決まっていること	39
何も経験できなくなる	26
誰とも会えなくなる	18
未知の世界への旅立ち	12
苦しみからの解放	6
神仏のもとへいくこと	1

人数

2年生53.1%、4年生48.9%、6年生59.1%が「死の教育が必要である」と回答している。(表10参照)また「死の教育をいつから始めるのが良いか」という質問に対しては、全体に「中学校」、「高校」を回答する者が多かった。6年生では「小学校低学年」という回答も多く見られた。「死の教育の内容」については「時間の貴重さを発見し、生の価値観の見直しと再評価を促す」が各学年ともに多かった。(表11参照)

8) 「死」の意味

表12のように「こぼむことができないこと」、「人生

図2 「死の意味」に関する因子分析 (Promax 回転)

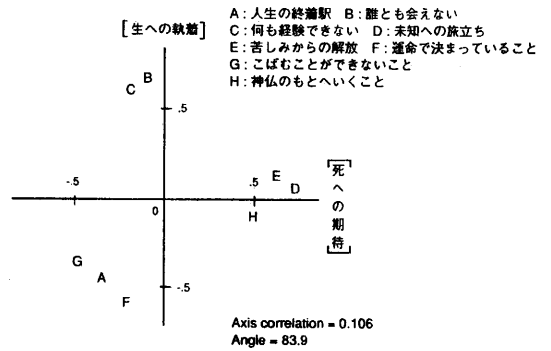
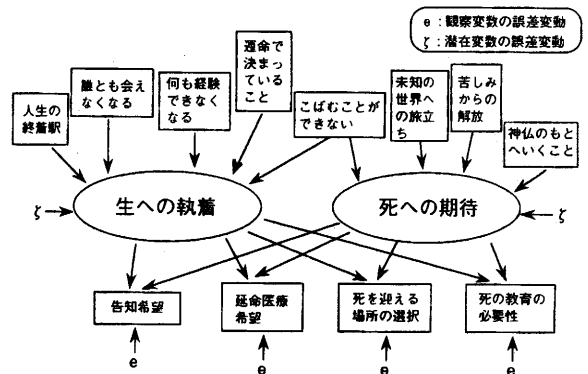


図3 医学生の態度決定に影響を及ぼす因子



の終着駅」、「運命で決まっていること」と回答した者が多かった。今回のアンケートは「死の意味」を8個の言葉から順位づけで3個選んでもらうものであったが、個々の言葉の相関について探索的に因子分析した結果が図2である。各変数に最高3点の重みづけをし、前述の「死という言葉から受ける感じ」と同様に、Promax 回転を用い抽出因子数2因子で分析した。その結果「生への執着」と「死への期待」の2つの因子が、Promax 回転の2因子の軸のアンクル角度が83.9度で、かなり独立性の高い因子として抽出できた。

9) 医学生の態度決定に影響を及ぼす因子

最後に「医学生は、「告知希望」、「延命医療の希望」、「死を迎える場所の選択」等の態度を、どういう因子によって決定するのか」を明らかにしたいと考え、次のような分析を試みた。前述の「死の意味」の因子分析から2つの潜在因子(「生への執着」、「死への期待」)がある程度きれいに抽出できたので、これらの潜在因子を使って図3のようなMIMICモデル (Multiple Indicator Multiple Cause Model)<sup>5)</sup>を構築し、共分散

構造解析に供した。しかし、相関係数はいずれも小さく潜在因子から観察変数(「告知希望」, 「延命医療の希望」, 「死を迎える場所の選択」)への矢印のt値もすべて低く、それぞれが独立でないという保証は得られなかった。すなわちその人の待つ「死の意味」が、どのように「告知希望」や「延命医療の希望」や「死を迎える場所の選択」に影響を及ぼすかは、本研究では見い出せなかった。

#### IV. 考 察

1) 「死の教育の必要性」について、「必要」と回答した人が約半数と意外に少なかった。その原因としては、この調査票でいう「死の教育」の内容の意味づけが曖昧であったため、あるいは現行の医学教育の過剰なカリキュラムを考え合わせ、とても「死の教育」を導入する余裕はないと判断したため、あるいは単に「死の教育」に無関心であったため等が考えられる。このことは医学教育の中での「死の教育」の位置づけを考える上での重要な基礎資料となると考えられるので、今後さらに詰めていく必要がある。

2) 「告知希望」, 「延命医療の希望」, 「死を迎える場所の選択」は、昨今の現代医療への批判的論争におけるトピックスということもあり、そのことを反映しているのか、概して高い回答率が得られた。これらの医学生が将来どのように医療をとらえ、展開していくの

か非常に興味深い。また、医療の行動を規定すると目される「告知希望」, 「延命医療の希望」, 「死を迎える場所の選択」の変数を“出力”と考えると、「死という言葉から受ける感じ」や「死の意味」といった各人の「死」に対する内的世界観が、どのようにこの“出力”に反映するかについては、本研究では意味のある構造化はできなかった。その理由として、調査票のデザイン上の問題や、「告知希望」等の“出力”が世間の流行の影響を受けやすく、個々人の本来持っている考えとはいいいくことが指摘される。今後の研究ではこの点の解明が望まれる。

#### 引用文献

- 1) 渋谷園枝, 渋谷昌三(1991)「生」と「死」のイメージ調査の基礎的分析, 山梨医大紀要, 8: 41-52.
- 2) 七木田敦(1991)看護教育における「死の教育」(Death Education)の検討—看護学生・短大生を対象にした意識調査から—, 学校保健研究, 33: 278-286.
- 3) 立川昭二(1991)生と死の TOPOLOGY, こころの科学, 35: 44-49.
- 4) 豊田秀樹, 前田忠彦, 柳井晴夫(1992)原因をさぐる統計学, 講談社, 東京.
- 5) 豊田秀樹(1992) SASによる共分散構造分析, 東京大学出版会, 東京.

**Abstract****A Study on Death Education for Medical Students**

Akemi KINOSHITA, Toru KINOSHITA, Toshimi OOMA,  
Sumio IJIMA and Akio ASAKA

We performed a study on medical students' acceptances of death to provide basic data for death education in the medical course. Subjects were 224 students of a medical college, average age 23.3. Results were as follows: 1) 81.2 % of the second grade students, 78.7 % of the fourth grade students and 54.5 % of the sixth grade students had no experience of death. 2) Two latent variables on "Image of death", which were called Sensual and Experiential recognitions, were abstracted by Factor Analysis (Promax Rotation). 3) 78.1 % of the second grade students, 69.1 % of the fourth grade students and 71.2 % of the sixth grade students desired "Notice of death". 4) 60.9 % of the second grade students, 57.4 % of the fourth grade students and 56.1 % of the sixth grade students had no desire for life's prolongation by medical treatment. 5) Most students knew the term of "Hospice" and 79 % of them "Desired to die at home." 6) 37.5 % of the second grade students, 47.9 % of the fourth grade students and 40.9 % of the sixth grade students thought "Death should not be actively discussed". 7) 53.1 % of the second grade students, 48.9 % of the fourth grade students and 59.1 % of the sixth grade students thought that "Death education was necessary". 8) Death's meaning was answered by the majority as, "the inescapable", "the termination of life's journey", "destiny's determination". Factor Analysis abstracted two latent variables; "Attachment to life" and "Expectation of death". 9) Covariance Structure Analysis (Multiple Indicator Multiple Cause Model) did not reveal the determining factors, which influence the behavior of medical students.

---

Department of Health Sciences